

令和5年度（2023年度）第1回熊本市生物多様性推進会議 議事録要旨

1 日 時 令和5年（2023年）7月 24日（月）14:00～15:30

2 場 所 熊本市本庁舎7階会議室（オンライン併用）

3 出席者 生物多様性推進会議委員(11名)

石黒 義也 委員	高宮 正之 委員
大住 和佑 委員	甲斐原 巖 委員
永野 陽子 委員	藤本 聡 委員
澤 克彦 委員	奥村 正美 委員
大澤 隆文 委員	蓑田 公彦 委員

※以下の委員はオンライン参加

藺畑 親志 委員

4 欠席者 生物多様性推進会議委員(1名)

佐山 勝彦 委員

5 次第

(1) 開会

- ・事務局挨拶
- ・定足数報告（12名中11名出席）
- ・配布資料の確認
- ・会長の互選について
- ・委員長代理の互選について

(2) 議題

- ・次期「熊本市生物多様性戦略」骨子（案）について

(3) その他

(4) 閉会

開 会

【事務局挨拶】

永田 努 環境推進部長挨拶

【委員長の選出】

熊本市生物多様性推進会議運営要綱5条第2項の規定により、本会議の委員長を委員の中から互選していただいた結果、委員長を以下のとおり決定する。

委員長：高宮 正之

【委員長挨拶】

委員長挨拶

【委員長代理の選出】

熊本市生物多様性推進会議運営要綱第5条第4項の規定により、本会議の委員長代理を委員の中から互選していただいた結果、委員長代理を以下のとおり決定する。

委員長代理：石黒 義也

【委員長代理挨拶】

委員長代理挨拶

議 題

【次期「熊本市生物多様性戦略」骨子（案）について】

高宮委員長 議事次第の次期熊本市生物多様性戦略の骨子案について、事務局から説明をお願いします。

磯田 環境政策課主幹より、資料1を説明

高宮委員長 事務局の説明に関して皆さんからご意見等ございましたらお願いしたい。

澤委員 骨子案の4ページで、学びにつながるところの認知度、生物多様性を知っている市民の割合の目標設定を令和5年度で25%としている。いっぽう、LINEアンケートでは生物多様性を知っている方が34%、言葉を聞いたことがある方が20%、合わせると半数を超える方々がなんらかのタッチポイントを持っている。これは驚異的な数字と感じているが、市としてどのように評価しているか。これを以て、ある程度達成の水準を満たしていると捉えていいか、教えてもらいたい。

磯田 環境政策課主幹 今回のLINE市民アンケートの回答者数が709名で、LINEを見た方がアンケートに回答していただいている。おそらく生物多様性という言葉を見て関心のある方が答えているため、認知度が高い状況になっていると思われる。認知度の向上に向けた取組は引き続き進めていく必要があり、社会に生物多様性を浸透させていくため、さらに工夫しながら取り組んでいく必要があると分析している。

澤委員 最近はテレビ視聴率も一般世帯全体で何%かというよりも、コア視聴率という形で、本当に届けたい強い関心層にどれだけ刺さっているかを評価していたりする。全般的な意味で知っている状態と、本当にこの活動を一緒に進めていく方々をどれだけ増やすかという意味で、LINEなどを通して興味ある方をしっかり囲い込む、巻き込んでいくことがひとつの指標となると受け取っている。

磯田 環境政策課主幹 ご意見を参考に、定期的にアンケートを工夫しながら進めていきたい。

甲斐原委員 アンケートに関連して、昨年までのアンケートは、知っている・知らないといった聞き方では全く意味がなく、やる必要がないと言った責任上、今回のアンケートは、かなり突っ込んであり内容も充実されていた。ただ、聞かれている項目の内容が、生物多様性(プラン)を知っている方であれば答えが出てくるような聞き方や内容と感じたため、今後、その辺の検討を一緒にしながら充実させていきたい。

方向性や人数はベースであり大事なもので別として、その評価面で、30%を切るようなパー

センターであっても、多くの方が取り組んでいるとしており、多くの方という評価の仕方がとても不思議に感じた。逆に少ないのではないか。10%台、20%台よりも30%が大きいから多くの方という言葉が使われたのか、そのような評価の基準が私には分からなかった。

アンケートの内容はかなり充実し、市民の意見、認識を高めていきたいという面ではとても進んだと思うが、今後、数字の評価方法を改善していけたらと思っている。そして、このアンケートをLINEだけでなく、いきもんネットに入っているいろんな団体を対象にするなど、できればタイアップして、この内容を充実させていきたい。例えば私が活動しているコロボックルの場合は、活動をした後に必ず子どもたちにはお絵描きをしてもらったり、保護者の方にはSDGsと並行して生物多様性について知っているか知らないか、どんな内容かを答えてもらったりできる。来られた方全員からの回答がなくても、いきもんネットの各団体など一部でもこのアンケートを行い、市民アンケートを充実させるという方向で協働できればと思っている。

磯田 環境政策課主幹 市としても、LINEだけでなくいろいろなところでアンケートを取って、いろんな方へ届くように発信していきたいので、よろしくお願ひしたい。また、先ほどのご意見として、問6関連で配慮した行動として既に取り組んでいることはあるかという設問を用意して、709名中680名の方がなんらかの活動に取り組んでいるという結果だった。それをパーセンテージで表すと約96%の方が何かしらの取組をしているということで、多くの方が、と発言した。ただ、依然としてまだ取組をされていない方がおられるので、工夫しながら進めてまいりたい。

高宮委員長 アンケートについて他に何かありませんか。

甲斐原委員 これまでの現行戦略で、例えば希少種、外来生物、指標種、絶滅危惧種を含めて、生物多様性の中のキーワードを一緒につくってきた。生物多様性のベースとして在来種があり、多様な在来種からなる生物多様性の豊かさがある。その極みとして希少種や絶滅危惧種というキーワードが出てくる。私どもは、金峰山系の西区柿原の成道寺川という重要な里山に指定されている狭い地域を中心に取り組んでいる。多様な在来種を含めた生きものたちが、バランスよく存在し、農林業も含めた環境でかろうじて生き延びている場所だろうと認識している。

生物多様性Cプランをつくったときも発言したが、そういう面でCプランを継続していくというのは基本的に大賛成。これまでのプランを継続し、更に世界や日本の大きな流れを取り入れていくにあたって、Cプランをもう一度確認するという意味でモニタリングも含めて、在来種について先生方と皆さんと一緒に考えていけないかと思っている。

狭い柿原の里山の中でホタル類、カヤネズミ、魚類、哺乳類などを対象に、モニタリングサイト1000も含めて多様な調査を実施しているが、調査を十何年続けていく中でもホタル類がかなり減ってきているというデータがある。一方では、大住委員のところが新たに江津湖でホタル調査をモニ1000で始められるとか、立田山で始められるという話がある。

このように、かなり充実している部分と、これまでCプランで重要な拠点とした、金峰山、江津湖、立田山、水前寺など、みんなの宝とされてきた場所にいる多様な生きもの、自然、歴史、文化がかなりダメージを受けてきているということを認識し、今一度新しいメンバーの方々と共有して次のプランに持っていきたいと願っている。是非皆さんのご意見を伺いたい。

高宮委員長 アンケートの件で。8ページで既に取り組んでいることがあるかという設問

がある。回答に、マイバック・ボトルを利用しプラスチックごみ削減とあるが、これを行っている人たちが、この取組が生物多様性にどう関係しているかをどれだけ理解しているかというのは、なかなか難しいのではないかと思う。特に今SDGsの方がたぶん浸透していると思うので、生物多様性がどういうことで生活に絡んでいて、陸の生態系も海の生態系も生物多様性に直結していることを示し、資源と生物多様性というものを結び付けて考えたら、もう少し理解度が深まるのではないかという気がしている。

必由館のアンケートは実は少しがっかりした。今の高校生は教科書が変わっていて、今の2年生が1年生の時に、生物多様性の中の種の多様性について全員ほぼ必修で習っている。ただし、教科書のかなり後ろのほうなので今の1年生はまだ習っていないか、2年生になる直前に習うようになってきていると思う。今年の2年生から生物の教科書が変わって、生物多様性や様々な内容が取り込まれるようになってきている。

高校生のアンケートがもう少しよくなるのではと期待していたが意外とそうではなかった。今の1年生は何も知らない可能性があるのも、1年と2年と分けると、2年生では浸透しているといった結果が出ているのではないか。アンケートの際、生物多様性をうまく説明しながら進めていった方が良いと思う。

梶原 環境政策課課長 アンケートについては取り方に問題があるのではないかと、というご指摘をいただいた。17%と検証指標に書いてあるのは、市が全体的にやっているアンケートのため、中身が変えられないということでそれを扱ってきた。

今回LINEのアンケートにあたってはそこを重視し、アンケートに答えることで、生物多様性の意味が少しわかるような工夫をさせていただいた。そこはまた皆さんと一緒に、より、そういったものが浸透できるように考えていきたい。高宮委員長が話された必由館高校については、言葉の意味を知っているという方が少し低いと思ったものの、言葉自体は聞いたことがあるという方が一般の人より多かったのも、生物多様性というものが何かよく分からないけれども、言葉は少しずつ着実に浸透してきていることは感じている。そのあたりは今後もアンケートなどを通してみていきたいと考えている。

甲斐原委員 アンケートについて高宮委員長が話されたように、高校から中学生の理科の生物の内容などもかなり変わってきて、生態系というキーワードも入ってきている。教育という視点がとても大事だと思っているので、委員長が言われた視点で、教育委員会とタッグを組んで、生物多様性についてトータルの部署と連携して取り組んでいただきたい。

奥村委員 今日は骨子案の説明とアドバイスということが最初に説明があった。基本的にはCプランの資料の3のところにあるように従来の自然保護に特化した取組ではなく、新たな目標に向けた取組について多くの主体を巻き込みながら、私たちの暮らしの基盤となる生物多様性の保全に組んでいくこととあり、これがCプランをつくる上での基本的な考えになると思う。

私は農村部に住んでいるが、昨日も地域で草刈りの作業をした。熊本地域全体において生物多様性を考える場合、面積的に一番大きい農業生態系における生物多様性が高いウエイトを占めている。生物多様性の保全に取り組んでいくのであれば、農村地域に住んでいる農家の方々を組み込んだ形での推進をしていくという形が、市全体の生物の多様性は高まっていくのではないかと思う。

私は戦後まもなく生まれた人間で皆様より年を取っているが、私たちが子どものころの農村地域ではまだ薪を燃料としており、学校から帰れば薪を拾いに行っていた。その後プロパンガス、電気が入ってきて燃料が非常に変わってきた。それによって農村部の里山の環境は非常に変化し、生物多様性もずいぶん変わってきた。農業に従事する人たちが非常に

減ってきて、農地が荒れてしまって竹山が増えたり、森林も落葉広葉樹林が多かったのが照葉樹広葉樹林に変わって、昆虫相とか植物相とか大きく変わってきている。その頃の生物多様性に戻すとすると、かなり労力的なものが必要になってくるが、そういう形ではなく現状の状態でなんらかの形で生物多様性を維持していくというのであれば、もう少し農村部に住んでいる方々との協力関係を入れ込んで取組んで欲しい。

永野委員 私は水前寺で活動をしており、子どもたちと江津湖で遊んだりするので、水というものを非常に身近に感じている。もう一つ、ロータリークラブでの奉仕活動の一つとして、小学校5年生に熊本市が策定している水検定の冊子を全員に差し上げている。砂取小学校は今年で3年目、今年はお水小学校が加わった。夏休み前にプレゼントして夏休みの間に、地域を家族と一緒に回ってもらったり、水に関して学んでもらったりして、秋に3級の検定試験を受けてもらっている。去年も一昨年も、砂取小は全員3級合格だった。

このほか、地域の小学生の子どもたちに絵をかいてもらって、あかりに貼り付ける『あかり』というイベントを開催しており、子どもたちは驚くような絵を描く。自然のものやSDGsなどについて全部描けている。高校生も含め、小さいときから自然環境に目をやること、そういうチャンスをつくっていくことも、とても大事なことと思っている。それに対して小学校の校長先生もとても喜んでおられ、今後も熊本の水資源のありがたさ、またそれを守っていくためのもの、そして環境を見て歩くということも、非常に大きいと思って活動している。

梶原 環境政策課課長 ご意見のあった一点目の農村における生態系について、今日はまず皆さんに前回のCプランに対して、次のプランの骨子をどうするかを尋ねたいというのが一つ目標であった。具体的な取組やどう盛り込んでいくかという話については、今後庁内でも農水部を含めて、いろんな生物多様性につながる取組について照会し、いろんな意見交換、その団体の方とお話など、どういった取組をすれば生物多様性が周知できるのかについて、可能な限り我々も進めていきたいと考えているので、いただいたご意見を参考にさせていただきたい。

それから小学生のお話であるが、特にここ5年間、このCプランが出た後すぐに地震があり、いろんなイベントがなくなってしまった。その次にコロナがきて、対面でのイベントというのがほとんどできない状況となった。やっと今それが回復してきて、イベントや出前講座などもできるようになった。また、新しい取組、例えばオンラインを使った授業が加わった。熊本市の小学生はタブレットを持っているので、そこにどんどん情報を入れることもできる。そういった新しいものとこれまでやってきたことを組み合わせ、どんどん推進をしていただきたいと考えている。

大住委員 江津湖でホタル調査をしている。今年はゲンジボタルの数が非常に多くて驚いたが、本来出ていたところは全然出なくなっており、違う場所が多くなっているという変化がなぜ起きているのかを見ておかないといけない。

また、ヒメバイカモが生えているところも変わってしまった。私たちは歩いて確認しており、その隣のゾウさん公園は今年市長さんも一緒に清掃活動をしてくださったので一時期はきれいになったが、現在は同じ状況なので、どう継続していくのかを行政の方と私たちと一緒に考えていかないといけないということがいっぱいある。

実はCプランを作った時よりも状況が悪くなっているのではということが多く、一度検証しなければいけないのではと思っている。どこもそうなのではないかと考えている。

梶原 環境政策課課長 先ほど在来種の話もあったが、私たちは絶滅危惧種や特定外来生

物の駆除の活動が中心になっており、熊本市らしさを守っていくということは、在来種というのを皆さんがちゃんと認識して、前はここにいなかったのにこっちにいるとか、そういった変化も含めてきちんとモニタリングなどを行っていくことはすごく重要なことだと思っている。私たちは人数も限られているので、いろんな活動をされている推進委員の皆さんにご協力いただき、いろいろ教えていただきながら進めてまいりたい。

菌畑委員 今日会議というのは次期戦略の骨子案の検討ということで、大きな流れがこれでいいのかということをお話し合うのが会議であり、私はこれまでの戦略を踏まえた上で次期戦略になっていると思っているので、これを大きく変えてしまうとこれまでの取組がなんだったのかというようなことになってしまうので、前回の戦略を踏襲する方向性でいいと思う。それからアンケートのところでも気になったところは、LINEで4万人に配信して、回答してもらえたものが700人あまり、パーセンテージとしては2%にも満たず、この2%の中の34%が知っているということなので、この辺の評価はもう一度考え直す必要があると思う。

12ページに国の基本戦略があり、熊本市の基本戦略が1から5まであるが、これらは全くリンクしていない。15ページの次期戦略骨子案の基本戦略のところでも、地下水というテーマで全ての戦略にこうして取組めたらという提案があったが、地下水の問題は北区だけで発生しているものと思っていたため、他の区の市民が関心を持ってくれるか心配するところではあるが、その辺りどのように考えているのか教えていただきたい。

梶原 環境政策課課長 まず一点目、12ページの国の5つの戦略と熊本市の戦略のリンクについて、国の説明会であくまでも地域戦略は熊本市の地域特徴に応じたものを作って欲しいと話があった。2050年の目標、2030年の目標は世界の統一した目標であるが、国が見るところと熊本市が一地域としてやるところとは全く違うので、熊本市としては今の戦略をベースに引き続きやっていきたいと考えている。

15ページの地下水について、なぜここに地下水だけピックアップしたかということ、どうしても生物多様性地域戦略、生物多様性の保全というのが分かりにくく、実は職員からも分からないと言われており、どうしたら生物多様性の保全につながるのか、熊本市らしさを含めて分かりやすいものをイメージしたところ、地下水をターゲットとし、まずは熊本市の市民の方、それから熊本市に興味がある企業の方、そういった方々に目を引いてもらうためのキーポイントとして書いた。

菌畑委員 生物多様性の戦略は、世の中のあり方を大きく変えていく戦略になる。大量消費のこの社会が大きく変わっていかねば、生物多様性戦略を成功させることはできないと思う。かなり難しい課題で、依然困難な目標だと思う。だからといって手をこまねいているわけにもいかないの、その多様性の損失を少しでも、最小限に食い止めるために私たちに何ができるかという、そういった視点で考える必要がある。

生物多様性を維持していくためには、もはや自然保護の視点だけでは不可能であるということがはっきりしてきている。特に昨今、海洋プラスチックの問題、海の生物の生活環境、生息環境が非常に危機的な状況で、人間活動によるプラスチックの大量廃棄、不法投棄など我々の生活のあり方そのものが問われている。これが生物多様性に対する大きな壁になっており、今のままの社会の在り方を続けていく限りこの問題は解決できないように感じる。早く世の中を循環型社会に変えて、我々の日々の生活を見直して、ごみを出さないようにするなど、毎日のちょっとした生活を見直していくような方策をして、全体で考えていけたらと考えている。そこで熊本市の取組をどうするかということになるが、当然熊本市の生活の在り方を変えていく必要があると思う。そのためには環境政策課だけでは、到底無理なので、全庁あげて取り組むべき課題であると考えており、その旗振り役が環境政策課

だと思っている。これから具体的な取組、計画が上がってくると思うが、非常に期待している。

ひとつ心配事項として、一昨年フラワーフェスティバルという緑の祭典があったが、これは生物多様性に向けた取組に本当にプラスになっていたのか疑問に思っている。多くの人を集めてお金を落とさせるような経済重視のイベントになっているようにも見え、なんとなく熊本市のそれぞれの担当部署が向いている方向がちょっと違うというか、同じ方向を向いてないようにも見えるが、その辺はいかがか。

梶原 環境政策課課長 緑化フェアは、昨年度は全国いろんなところで持ち回ってやるような緑化フェアが熊本市で行われたということで、3会場で開催した。今年からはそのアフターイベントとしてレガシーを引き継ぎ、熊本市花博の開催を予定している。そのなかでは、やはり生物多様性の保全ということに目を向けていただこうと、特に今年、熊本市は、江津湖と中心市街地、去年立田山だった開催地を金峰山に移し、金峰山の山から海を見るとか、それらを含めて甲斐原委員の方でいろいろ一緒に実施する予定と聞いている。そういった市民活動の方も一緒に交えながら、生物多様性、生きものについて考えていく機会をたくさんいろんな場面でやっていきたいと考えている。まだ計画段階のため、森の都推進部と環境局と連携して進めているところなので、またいろいろ決まったらご報告させていただきます。

高宮委員長 今日の話としてはこの骨子案をこれからどう進めていくのかということを検討していかなければならないので、今までの説明にあったように、今までのプランを生かし、検証しながら新たに加えていくということで、ご意見いただき検証があったが、骨子としてこれで進めてよいか議論いただきたい。

甲斐原委員 今までのCプランをどう見直すかという共通理解がなければ進まないのではないかとということで改めて骨子案を見ると、世界の大きな流れの中で、企業と組んでどんどん投資をし、そこに民間も入っていくという大きな流れが来ていると思う。そうでなければ生物多様性の豊かさは維持できない。地球規模で維持できないため、多様な企業も含めていろんな取組を、政府もしていくという大きな流れでこの骨子案を見たときに、新しい取組として企業や商品サービスの開発とかそういう大きなことが来ているので、企業関係の人たちにも参入していただき、パートナーシップを組んで進めていきたい。

持続可能な開発のための教育について、理解啓発という視点からも今後、教育を進めないといけない。それは先ほどからいろんな委員から出ているように、小さい子どもの頃から自然と直接触れ合うことが重要で、直接体験することこそが子どもたちの机上の学習に入っていく段階のベースを支えるというのは誰も理解できる。特にICT等とパソコンの操作が自然の社会になっているので、原体験として、農業であり自然であり農林水産等を通じて、自然と人の共生を目指すのであれば、そういった自然と関わることについて強く教育と組んでやらないといけないと感じる。

熊本市は、幸いにして金峰少年自然の家を大改築して多くの市民の方たちに広げる取組を実施している。関係部署だけで情報発信し企業と組んでというやり方の時代はとうに終わっているのもっとオープンにしてアピールして、いろんな方の意見、理解を深めていけるといいと考えている。

基本戦略、「守る」に、動物由来感染症対策というキーワードが昨年度末にも出ていたが、人と自然の健全性と環境の健全性を共にやっていこうという考え方で、福岡が先進的に取り組んでいるが、ワンヘルスを熊本も取り入れるかは別として、考え方としては生物多様性と重なる部分があり、ここに動物由来の感染症としてコロナを対象とするかは別として、今後もウィルスの脅威は想定されるため、そこはきちんと守るという位置づけをし

ていけたらと考えている。

基本戦略の4、OECM、保護地域外の生物多様性に貢献している場所の促進に該当する例として、柿原の里山について申請している。

江津湖、水前寺のように、生物多様性を保全の試み、調査データの蓄積、子どもたちへの教育、文化についての情報発信など、生物多様性そのものについて情報発信、実践されているという面で、OECMについて熊本市のCプランでいろんな重要な地域を挙げた。そういった場所に環境政策課の方から、これだけ取組んでいるので環境省、生物多様性センターを通してOECMに取組んだらどうか、といった情報発信もやっていけたらと思う。

自然保護の考え方だけでは守れないという意見もあるが、現在、自然保護の概念は社会の動き、世界の動きに対して一緒にやっという、政治的にやっという考え方が強くなってきている。例えば、農業基本法は今度改変されていくが、その中に農地の多様性として生物多様性をどう守るかという視点が足りないということで、意見がどんどん挙げられている。そういった情報もこの会議の中で共有していけたらと思っている。

最後に戦略5「活かす」で、もっと広い分野を対象にというような発言があるが、各地域、重点地域の歴史文化、産業をより「活かす」ために、内容をどうするかといった際、自然や第一次産業があって生物多様性が維持できていることを発言していきたいと思っている。そういう面で考えれば、骨子案には大きな世界の流れのキーワード、ポイントが入っており、Cプランのベースの部分振り返った中で、新たなキーワードとして提案してあるものと私は理解している。この骨子案で是非また皆様と議論を進めていきたい。

藤本委員 15ページの骨子案は私も賛成で、特に地下水を取り上げられていることがとても大事だと思う。生物多様性は日本全体で取組んでいくことになるが、熊本市で考えた際に、絶対的な特徴とは地下水だと思う。そういう意味でここに取り上げられているのは非常に良いことで、その前の13ページの方向性の中の3番に、分かりやすさの追求という大事な記載がある。生物多様性は分かりにくい部分があるが、熊本の地下水は市民に浸透していると思うので、地下水を守ることが生物多様性につながるということに結びつけてあげることが非常に大事だと思う。

これによって認知度も向上し、分かりやすさにつながると考える。水道水を100%地下水で賄っていること、農産物の生産にも寄与していること、スイゼンジノリなどの希少動植物もあるので、地下水と生物多様性のつながりをかみ砕いて説明し、16ページの骨子案にどんな行動をとるべきかとあり、さらに第5章に具体的な取組とあるので、是非、そのようなどころでしっかり書いてもらいたい。

例えば、TSMCが進出して地下水の問題が懸念されているが、熊本の地下水を保全している熊本都市圏、熊本市を含めて12市町村あるが、その住民一人一人が1分間お風呂のシャワーを止めたら、年間で、TSMCの工場が1年分取水する地下水の量約480万トンに匹敵するという話がある。そういう地下水保全を身近に感じられるようなことをコラム的に書いてもらうのも大事だと思う。

また企業の話について、15ページの基本戦略1の赤丸の最初に、企業による生物多様性に関する情報開示と促進・TNFDとある。企業にとっても生物多様性にどう取り組むかが非常に大事になっていて、自分たちの企業価値を向上させるだけではなく、サプライチェーン上の問題、製造業であればどこから原料を購入して、製造し、製品をどこに販売していくか、そのつながりの中で、将来的には、購入・製造・販売の一連の過程で生物多様性に配慮しているかを問われるようになる。生物多様性に配慮していないと取引ができなくなる。そういったTNFDという生物多様性に係る情報開示について、世界の枠組みができつつあり、肥後銀行も、このTNFDの枠組みに入ることを検討しているが、これからは、企業は生物多様性に配慮せざるを得なくなってくる。

そこでの問題は、企業が熊本で生物多様性に取組むというときに何に取組めばいいのか分

からないということである。その時にこの戦略が非常に大事なものにもなるわけで、熊本市の場合は、TSMCの進出で立地企業もこれから増えると思うので、企業がこの戦略を読んで、これに取組めばいいのだということを知りやすく書くことが重要で、その代表がやはり地下水だと思う。市民の視点、企業の視点、それから認知度向上や分かりやすさの視点、そういった点から地下水を大きく取り上げることは大事だと考える。

蓑田委員 10ページの骨子をつくるにあたって、県も同様に、今回の地域戦略をつくるにあたって現行戦略をまず振り返る、現行戦略でうたったところが実際どうだったのかをまず検証した。その中で、できたこと、できないこともあり、この骨子案にもあるとおり、生物多様性の保全は長期的な施策展開が求められるということから5年というスパンではなかなかできない部分があるので、必ず次期戦略も現行戦略を踏襲するということが大事と感じて作った。

今まで話があったとおり、生物多様性の保全というものが成果として分かりづらいというのは県も同様で、地下水をクローズアップするのは非常に分かりやすいと思う。13ページの方向性の中で確かにそうだったのが、2番の既存事業をまずは反映させるということで、これは県の計画も同じである。やはり自然保護分野の計画だけでなく、先ほど言われたように農業や土木などでも、生物多様性の保全に配慮した取組をされているので、そういう部分は広く取り上げて計画の中に入れていくと、非常に分かりやすくなると思う。

大澤委員 10ページ目にあった絶滅危惧種の保全、外来種の駆除、緑地の創出などが、これまでは一部地域にとどまっておき、もう少し踏み込んだ振り返りが必要ではないか。それが何故か、お金が単純に足りないのか、協力する市民が足りないのか、理解が足りないのか、場所がないのか、もう少し何が足りなかったのかという分析をしないと、「外来種駆除します」、「緑地を創出します」と、また次の戦略で同じように書くだけでは、もしかしたらあまり進まないかもしれないと思う。

国の場合は、Japan Biodiversity Outlookという日本全体での生物多様性の総合評価みたいなものやってから国家戦略の改訂をしたり、Global Biodiversity Outlookという世界規模の生物多様性の総合評価をして振り返りをしてから、昆明・モンテリオール生物多様性枠組が作られたりしている。熊本市で、そこまでカチツとした総合評価まではしないとしても、今までの戦略では保全の取組が何故「一部地域にとどまっていたのか」という、もう少し踏み込んだ分析をすることが、次の骨子案の中身に反映されていくと、より充実した戦略になると思う。

環境省では地域戦略を策定するための手引きを国で用意して報道発表をしている。それを必ずしも全部そのまま踏襲する必要はなく、やはり熊本市では地下水を前面に出したユニークな戦略を作っていただければいいと思う。その手引きの中で強調していることの一つは、空間計画である。文字でひたすら書くだけでなく、ある程度地図に落とし込んで分かりやすく、どこを守るべきか、どこが危機に瀕しているか、ビジュアル化するということのもの。

今回の市の資料では、最初に「2050年をイメージし長期的な視点から熊本市が目指す姿」という絵のようなものがあり、分かりやすいと感じた。それぞれの各区の特徴など、もう少し細分化した情報を次の戦略の中に出してくるのであれば、そういった地図や空間計画的なものもビジュアルとして入れると、よりメッセージとして伝わるかもしれない。

地域戦略の手引きの中でのもう一つのキーワードとして、ロジックモデルといって、いろいろなものがどういうふうにつながっているのかという関係を図式化して、つなげるものである。今回の骨子案では、赤字でかなりいろいろ要素を追加しており、たくさん登場人物が出ていることで、それぞれのつながりが少し分かりづらくなっていくかもしれない

いうデメリットも懸念されるため、地域戦略の手引きでロジックモデルが参考になれば策定において活用していただきたい。

奥村委員 次期戦略骨子案の15ページに具体的な項目が示されており、赤字が新たな取組で、今後、基本的な国の戦略と違って熊本市としての戦略を考えていくのがいいのではないかと思う。

その中で基本戦略の3の中で赤字の一つの中に気候変動への対応があった。事例として熊本を持ってきたので紹介する。現在、温暖化が進んでいるのはご存知と思うが、これは温暖化で分布が北上している昆虫類である。これらは元々熊本にはいなかったが、北上してきており、一時発生して冬場にはいなくなるが、中には一部地域で定着するものもいる。

生物多様性が温暖化によってどう変わっていくのか分からないが、温暖化によって種類数の増加や減少もあると思う。先ほど絶滅危惧種や在来種の問題などの話があったが、温暖化によって熊本に北上してきている生き物にも注目すべきではないか。これはイヌマキの害虫のキオビエダシャクという蛾で、本来は奄美大島以南にしかいなかったが、鹿児島から熊本へと北上し、最近では水俣でも発生している。また、クロマダラソテツシジミというシジミチョウが一時発生している。この蝶はソテツを食べる。また、トウワタやヒメイワダレソウなどの園芸植物を食べて熊本で一時発生するものもいるが、こういうものを偶産種という。偶然に産する種類であるが、こういうものも含めて生物多様性が温暖化でどう変わっていくかを見ることもいいのではないかと思う。

高宮委員長 今回、骨子案として事務局から出された案でこのまま進めていいかということ、特に地下水というものを全面的に打ち出しているということで、細かいことはこれから進めていかないといけないと思うが、こういう格好で計画を立てていくことに、反対なら反対、これでいいかという意見をいただきたいが、いかがか。

甲斐原委員 先ほどの地下水というキーワードは熊本にとってとても大事で、阿蘇の伏流水が湧き上がって保全して私たちは恵まれている。一点気になるのが、地下水が湧いて飲み水にしている、江津湖水前寺で湧いている、規模だけで言うと金峰山湧水群というとても豊かな水資源があるということ。熊本市で考えたときに一般に広げるために地下水というキーワードは大賛成だが、その地下水が湧水と関連したり、川と関連したりということを入れた上でキーワードの地下水を使っていきたいと思う。

つい最近、西区の柿原地区の里山に指定されている道成寺川に油の流出事件があった。すぐに環境政策課に連絡して担当の水保全課につないでもらい、土木センターにも連絡した。約1時間後、水保全課と土木センターから二人ずつ、現場のオイルフェンスを持って来て対応していただいた。生活に身近なものであり、農業に関わることもやっているので、その視点から言っても地下水をキーワードとすることに大賛成である。

地下水が湧水と関連し川と関連し、熊本市の宝の江津湖水前寺等々で湧いているという、文脈の中で是非地下水を使っていきたい。そういう視点があれば大賛成で、熊本市はこれまでも、これからも、地下水というキーワードで市民の方と一緒にやっていると、それくらい広く水というのが生物多様性のベースになっているということを最近体験したので、是非そういう視点で地下水というのを大事にしていきたいと思う。

高宮委員長 今日は、次期戦略の骨子をどう進めていくのかというのが中心で、いろんな問題点が出てきたと思うが、この事務局案で進めてよろしいか。

澤委員 骨子として国から先ほどご意見があったように、検証をどうするか、戦略を立てて区切ることはなかなか難しいので、次期戦略の中にその検証プロセスを組み込み、施策中にメニュー化することによって、前半のプロセスで前期のフェーズ1をしっかりとレビューすること自体を施策に盛り込むことで、この駆動性と連続性というものを担保できるかなと思う。

高宮委員長 それでは、そういう格好でこれから進めて、9月までこれを元にして広げてもらえたらと思う。今年熊本県より一年早く福岡県が多様性戦略を出していて、内容は知らなかったが、この前機会があって見た。どうしても生物多様性とは、というところから始まるが、福岡の場合は生態系サービスの説明から始まり、自分たちとの関連性を示したあとに生物多様性とは、という流れになっており、この流れは知っておけばよかったなと後から反省した。生物多様性について分かりやすく身近なものとして、やわらかく説明していく必要があると思った。

高宮委員長 それでは、予定していた議事をすべて終了したので、進行を事務局にお返しする。

閉会

緒続 環境政策課副課長 これをもって令和5年度第1回熊本市生物多様性推進会議を閉会する。